

## 2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

### A. コースワークの充実・強化

#### ②分野横断的な科目群、副専攻科目群等の充実

##### 《人社系》

##### ●茨城大学教育学研究科

##### 「地域教育資源開発による高度教育専門職養成」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

分野横断的な科目の運営体制を各専修1名からなる調整室が担うことにした。その際、このプログラムをどのように意義づけるか全体としての意志一致に至るまで、かなりの議論を重ね、調整室としての相互理解を得ることができた。プログラムは出発するが、担当教員全員がその意図、方法を理解するには時間がかかり、しかも実行してみないと分からない部分も多数あることに難しさがあった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

GPのようなプログラムの策定は、新しさが求められている為に、どうしても未経験な事柄に直面する。これについて、それぞれの専門家が意見を述べることで当然、意見の対立点が出てくる。これを消化しながらプログラムを進めるのは易しいことではない。しかし、本プログラムの場合、このことによって逆に、大学院教育を考える新たな場として充実した議論を展開することができた。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

担当教員全員が本プログラム理解に真剣に取り組み、より充実した内容となるよう活発な議論を行った。これまでの議論に費やした時間はきわめて貴重なものとして、今後の大学院改革の起点となっている。